

「開拓之礎」

長野県軽井沢町・大日向開拓地

長野県の東部、群馬県境に位置する北佐久郡軽井沢町は標高900～1000mの高原の町で避暑地、別荘地として有名。同町の大日向（おおひなた）開拓地は、南佐久郡の旧・大日向村（現・佐久穂町大字大日向）から旧・満州（現・中国東北部）に開拓団として渡り、戦後に引き揚げた人たちが入植した地区である。

満州移民政策で、町村ごとに農民を送り出す「分村移民」が推進された。大日向村は1937（昭和12）年、分村移民を計画。約220戸約680人が満州吉林省に渡り、第二の大日向村をつくった。全国初の分村だった。しかし、45年の敗戦で、村民の生活は一変。逃避、引き揚げ中に食糧不足や寒さ、疫病などで多くの犠牲者が出た。

苦難を乗り越えて46年に帰国した人たちだったが、大日向村に住む場所はなかった。そのため、65戸168人は47年、浅間山麓の軽井沢町に入植。入植地を再び「大日向」と名付け、開拓を始めた。土地は払下げの国有林で、人力による森林伐採、一畝一畝の開墾は困難を極めた。

火山灰の砂礫が多い高冷地で、強酸性の土壌だった。肥料不足もあり、作物の生育は良くなかった。その上、冷害、霜害、浅間山噴火の被害など、農作物災害が多かった。開拓当初のジャガイモやソバの栽培から、酪農を取り入れ、やがては、キャベツやレタスなどの高原野菜の栽培へと変わっていった。他産業への転職も進んだ。

昭和28年、大日向公民館の敷地の一角に、満州で没した374名と入植以来の15名の霊を祀る慰霊碑が建立された。碑銘は「開拓之礎」。裏面には、開拓遺歴と開拓団員名が刻まれている。開拓遺歴の末尾には、「三十九年九月一日皇太子殿下御一家の御来啓を賜る 団員総意により入植以来十五名の霊を合せて茲に謹んで慰霊碑の建立をなす」と記されている。

なお、同公民館には、「大日向開拓記念館」が併設されており、入植当時の農機具などを展示している。



